

伝統工芸を守る京都

オソル ジャマー

私はモンゴル国立大学の法学部の学生で、ボランティアをしています。去年の夏は「子供教育支援センター」という非政府組織で中学生に日本語を教える経験をしました。その一授業について紹介します。最初の授業で、生徒たちにこれから授業をどのように続けると学校の授業より面白いかについての意見を聞くと「一週間に一回日本文化を知りたい」と言いました。私は彼らの言葉通りに毎週何か日本文化について伝え、学生が言語を学ぶ上で文化理解が促されるような取り組みをしました。

ある日の授業で日本の首都だった、一番伝統文化が多いと言われている京都についてのいくつかのNHKの番組を紹介しました。私が話したのは、京都について一般的な情報¹でしたが、後に生徒たちは私が気づけなかった点について議論しました。これはモンゴルと全く違う状態である京都の伝統工芸のことです。なぜそのように議論になったかという、京都には伝統工芸品を紹介する京都伝統産業ミュージアムがあり、国が認めている伝統的工芸品が17品目もあるからです。その伝統的工芸品の技術を守るために日本政府は支援をしており、若者向けに様々な活動を行っていることも理由でした。

また、中学生は、モンゴルと違って日本が持っているものに着目しました。それは「伝統工芸作りの体験」です。ビデオで伝統工芸について知らない児童は、より深く知るために伝統工芸づくりの体験を行っていました。京都市立御所南小学校5年生の総合的な学習という時間、「伝統工芸の未来」のテーマで小学生は伝統工芸体験をした後「伝統工芸の魅力を感じた」と言っていました。体験をした上に、児童は職人から伝統工芸が抱える悩みである後継者不足についても知りました。伝統工芸品の大事さを知った児童は、その良さを多くの人に知ってもらうために活動を行いました。それは、市役所と相談し、自分たちで作った伝統工芸を低学年、地域の人や観光客にも美術館で見せて口頭説明をすることでした。

その文化紹介以降、私はモンゴルの伝統工芸品について調べてみて、モンゴルという国には沢山の伝統的工芸品とその独立的な技術があることがわかりました。モンゴルは定住生活に移行してきた国ですが、昔から受け継がれて来た遊牧民の生活が今も存在しています。遊牧民は家畜を飼いながら、場所を移動して生活をしており家畜の牛、馬、羊、駱駝、山羊の肉を食べ、ミルクを飲み、ミルクで乳製品を作り、皮または羊毛、山羊の柔毛、骨、角などを使って服や工芸品を作っています。

その上、駱駝、牛、馬を移動手段として利用していました。牛皮で馬乳酒を作るときの革袋やできた酒の入れ物、駱駝皮で革紐、馬皮で馬勒、手綱、鞭な、鞍に付ける鞆などの馬具、羊毛で伝統的な服であるデール²や座布団、山羊の柔毛でカシミヤ製品、骨でゲーム、キセルやナイフ、石の嗅ぎタバコ入れ

¹世界遺産（銀閣寺、上賀茂神社など）、「祇園祭」、「天橋立」など

²デールは、何世紀も前からモンゴル人の中で一般的に着用されていた伝統的な衣服で、綿、絹、羊毛または錦で作られている。特に乗馬用に設計されており、着用者の膝の下の長さで、裾にいくにしたがって扇形になっている。風を遮断する閉じた裾、手の寒さを防ぐ袖口があり、長時間の乗馬をサポートする。乗馬の衝撃から腎臓を守る幅広のベルトを備わっている。遊牧民の老若男女は、今でも一般的に着用している。都市部では、デールは主に高齢者またはお祝いの機会にのみ着用される。

(Snuff bottle)³、角等で色々な道具を自分たちで作っています。家畜の皮で作られた冬の衣類は、暖かくて軽いのでマイナス 40 度まで寒くなるモンゴルの気候に適します。そして、皮で作られた馬具や道具は壊れにくく、耐久性があります。

しかし、モンゴル政府も市民も伝統工芸に注意を払っていないため、それに関する調査や情報はほとんどありません。そのため、私は、周りの 20 代の知り合いに調査を行いました。結果は 31 人の回答者の中で 4 人しか伝統的工芸品について知りませんでした。この結果は、現状の後継者不足や伝統的工芸品がなくなる危機に瀕していることを示しています。その理由は、伝統的工芸品が遊牧民の生活のみに適合していますが、定住の市民はその価値についてあまり知らないためです。したがって、遊牧民によって発明された工芸品を定住の人々に合うように変えて使うとモンゴル人がその価値を理解すると思います。例えば、羊毛でモダンなデザインのデールを作って、定住者の生活と結び付けて、都市の若者向けに売る、子供の頃から伝統的工芸製作を経験するなどした方がよいのではないのでしょうか。そうしないと、私たちの伝統的なものが一つずつ消えてしまいます。そして、モンゴルという国が他の国と何が違って存在しているかの意義が失われてしまいます。

以上のように日本でも、モンゴルでもそれぞれの特別な伝統工芸品、その技術があり、両方にも後継者不足の問題があることがわかりました。しかし、その問題を解決するようにしている努力、伝統工芸品を維持している方法の違いがあります。その違いは「体験」です。モンゴルでは伝統工芸品製作を引き継ぐということに重点が置かれず、その活動はほとんどありません。そのためにモンゴルの伝統工芸品は輸入品におき代わり、忘れ去られそうな状態です。そのため、モンゴル人は京都のように学校などで伝統工芸品を作る体験してみたらよいと思います。それを通して、希少なのに、遠くなっている遊牧民の生活を理解し、伝統工芸品の価値をわかるでしょう。その結果、自分に合ったモダンなデザインにも変更できる後継者も増えるのではないのでしょうか。京都は伝統工芸品を引き続き保護し、若者に伝わるようになったらよいです。モンゴルは京都を例にしてこれから政府支援し始めて欲しいです。

³ 嗅ぎタバコ入れはマナ、ジャスパー、チュンチノロフなどの貴石で作られる。蓋はターコイズと珊瑚、スコップは金と銀でできている。古来、嗅ぎタバコは風邪や感染症の予防に使われていた。今は伝統的に挨拶するために嗅ぎタバコを使っている。